

<h1 style="font-size: 2em; margin: 0;">指導資料</h1> <p style="font-size: 1.2em; margin: 5px 0;">鹿児島県総合教育センター 平成31年4月発行</p>	<h1 style="font-size: 3em; margin: 0;">外国語</h1> <h2 style="font-size: 2em; margin: 0;">第89号</h2>			
	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 15%; text-align: center;">対象</td> <td>中学校 義務教育学校</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">校種</td> <td>特別支援学校</td> </tr> </table>	対象	中学校 義務教育学校	校種
対象	中学校 義務教育学校			
校種	特別支援学校			

英語で考えや気持ちを伝え合う力を育むための 中学校外国語科の文法指導

新学習指導要領においては、英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う言語活動を実質化すること、そして、英語による授業を基本とすることが示されている。そこで、新出の文法事項の取扱いを中心に、生徒の表現力を育成する学習過程の在り方や実践事例を提案する。

1 外国語科が目指すもの

新学習指導要領（平成29年告示）においては、聞くこと、読むこと、話すこと〔やり取り〕、話すこと〔発表〕、書くことの5領域における知識及び技能を活用できる生徒の育成を目指している。その中で、特に授業において互いの考えや気持ちなどを英語で伝え合う対話的な言語活動を行うことが、これまで以上に重視された。また、授業を英語で行うことを基本とするとともに、具体的な課題等を設定するなどして、既習の語彙・表現などを実際に活用する活動を充実させ、言語活動の実質化を図ることが求められている。

知識及び技能は、活用の機会を与えられることで、生きて働くものとして習得が促されるものである。したがって、この考え方に基づき、語彙や表現を扱ったり、理解活動や表現活動を展開したりする必要がある。そのためには、文法等について日本語による丁寧な説明を行い、その後にドリル的な練習を繰り返すといった指導から、言葉の意味や規則、働きについて、生徒が英語による活動の中で主体的に理解を深め、活用できるようにする指導に転換することが求められる。

2 知識及び技能の定着を図る指導の要点

生徒が新出表現を活用できるようにするための学習過程としては、図の「新出表現の扱い」に示すものが考えられる。4番目の「形式の確認をする」場面においては、日本語による補足説明が必要になると思われるが、ほとんどの活動は英語で行うことが可能である。

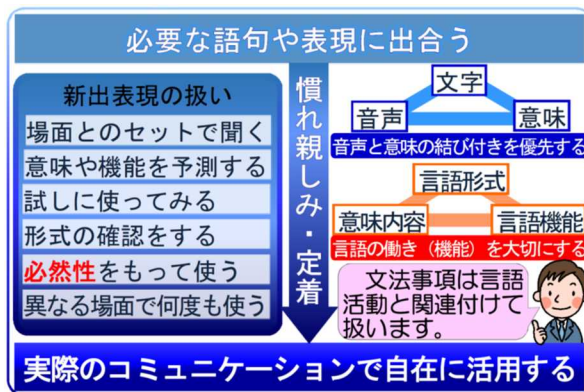


図 知識及び技能の定着の過程

知識及び技能の定着に向けては、図の右側に示す「文字・音声・意味」の関係を意識して、場面の中で聞いたり話したりする活動を十分に行った上で文字指導を行うようにしたい。また、「言語形式・意味内容・言語機能」の関係を意識して、ある言葉がもつコミュニケーションにおける働きについても、英語を使う体験を通して理解させるようにしたい。

3 新出の言語材料の指導例

新出の言語材料を指導する際は、場面や状況を明確にした上で、それらと関連付けた多くの例を示し、生徒に意味や用法を類推させる。その際、意味やイメージと音声結び付

くようにする。そして、明示的に指導を行う前に、生徒による規則への気づきを踏まえた補足説明を行うことが大切である。以下に、関係代名詞を授業で初めて扱う際の、主格の関係代名詞の導入場面の指導例を示す。

1 導入で興味・関心を高める。

大型テレビやスクリーン等で右のような画像を順番に示しながら、生徒に問い掛ける。

(発話例)

T: Let's have "Guess-Who Quiz."

Please guess who this person is.

(を示しながら) Hint One. This is a boy who was born in Italy.

(を示しながら) Hint Two. This is a boy who was made of wood.

(を示しながら) Hint Three. This is a boy who can't tell lies.

Who is this boy? Does anybody can answer?

S: *Pinokio*?

T: That's right. (を示しながら) This boy is Pinocchio.

Pinocchio is a boy who was born in Italy. He is a boy who was made of wood. And he is a boy who can't tell lies.



指導のポイント

生徒の興味・関心を喚起しながら新出文法に触れさせる。特に、英語を聞かせる時には、a boy who ...の部分ゆっくりはっきりと言い、視覚情報と英語だけで理解させる。

2 多くの例示により、用法について気づきを促す。

別の画像を示し、生徒に問い掛ける。

(発話例)

T: Here's another question. Please guess who this person is.

(を示しながら) First, this is a boy who has a nice car.

(を示しながら) Second, this is a boy who can ride a bike.

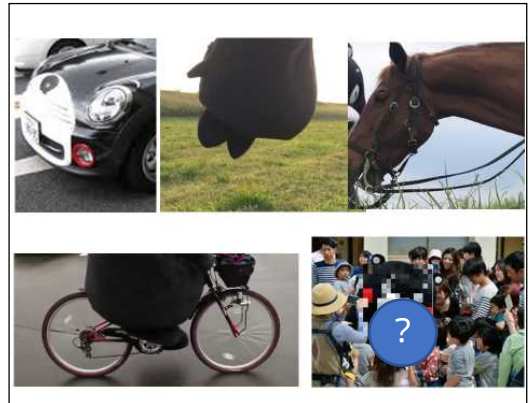
(を示しながら) Third, this is a boy who can jump high.

(を示しながら) Fourth, this is a boy who likes horses.

(を示しながら) The last hint. This is a boy who is loved by everyone. Can anyone tell us who this boy is?

Ss: Kumamon.

T: That's right.



指導のポイント

初めは伝え合う内容に焦点を当てながら聞かせ、徐々に新出文法の意味や形式に意識が向くようにする。

例文には可能な限り平易な語句を用いて、生徒が用法に意識を集中できるようにする。

3 言語形式と意味内容を結び付け、音声で慣れ親しませる。

2の画像の写真を一つ一つ指し示しながら、生徒にリピートさせる。

(発話例)

T: Please repeat after me. Kumamon is a boy who has a nice car.

Ss: Kumamon is a boy who has a nice car. (以後、同様に進める。)

指導のポイント

英語を聞かせたり言わせたりする中で、音声に十分慣れ親しませる。

用法への気づきを促すために、大切な部分はゆっくりはっきり言う。

4 用法について生徒に推測させる。

ヒントを与えながら，関係代名詞を伴う部分の英語を考えて言わせる。

(発話例)

T: Now it's your turn. Please make sentences.

How about this one? (を見せながら)

Kumamon is a boy

Ss: Who has a nice car.

T: Good. (を見せる) Next,.... (以後，同様に進める。)



指導のポイント

明示的な説明の前に，場面設定を行った上で英語を聞かせたり，英語でやり取りをしたりすることにより，生徒に新出文法の意味と用法について推測させる。この例では，関係代名詞の働きに気付かせる。説明する表現として3単現のsや助動詞，受動態などを用いているが，この段階では，気付くべきポイントに生徒の意識が向くようにする。

5 明示的な説明を加える。

(発話例)

T: (を示して) Do you remember what word came after "boy"?

Ss: "Who."

T: That's right. (を示して) Now, please think what this sentence means. I'll give you 30 seconds. (30秒後) Then check your answers in pairs.

板書あるいは大型テレビでの表示例

Kumamon is a boy

Kumamon is a boy who has a nice car.

もし答えられなかったら，次のようなヒントを与える。

I'll give you a hint. When you use this sentence, you want to tell someone that Kumamon is a boy and he can jump high. First, you want to tell that Kumamon is a boy. Then, you want to tell more about Kumamon. Now talk in pair once again.

正しく理解できたら，を示して補足説明をする。ここでは，下線部の名詞 a boy の後に who が使われていることや，その後 a boy を詳しく説明する言葉が続いていること，who の後に動詞か助動詞が続いていることを確認する。そして，who が直前の名詞を説明するための合図のような働きをもち，日本語に置き換えられないことを理解させる。

Kumamon is a boy who has a nice car.
can ride a bike.
can jump high.
likes horses.
is loved by everyone.

指導のポイント

説明は，生徒が何に気を付ければ正しく使えるようになるかという視点から端的に行う。丁寧な説明を1回で済ませようとするのではなく，その後の授業で繰り返し触れ，想起させることにより，時間を掛けて使えるようになることを目指す。

新出文法が文中で果たす役割を理解させた上で，慣れ親しむ時間を十分確保する。ここでは，例えば，「主格の」や「先行詞が人である時に使われる」などの情報は，目的格の関係代名詞や，which に触れさせた後に，それぞれを対比させて違いに気付かせるようにしたい。

6 練習の活動を行う。(この活動は，明示的な説明の後に行う場合と，4の後に行う場合とが考えられる。)

写真や絵を提示して，関係代名詞 who を用いた英文をつくらせる。教師の後に続けさせたりペアで活動させたりする。必要に応じてパターン・プラクティスやドリル的な活動も行う。

指導のポイント

練習の活動では，音声でのやり取りを十分に行う。

指導対象以外の文法の注意点について生徒に指摘させたり，補足したりする。

書かせる際は，何度も言ったり聞いたりした表現を書かせるようにする。

7 考えや気持ちを伝え合う言語活動を行う。

単元終末の活動として、興味のある人物について調べてクラスで紹介する活動を行うなど、生徒が話したり伝え合ったりする活動を行う。

(生徒に表現させる英文の例)

I'm going to tell you about a person who changed the history in Japan. He was born in Edo 210 years ago. He came to Kagoshima when he was 41. He believed Japan needed to learn from Europe and introduced new things which made Kagoshima strong. A few years later, Kagoshima became one of the strongest in Japan.

He was the leader who gave chances to young and great people such as Saigo Takamori and Okubo Toshimichi. I want to be a person who can change history like him. Do you know who he is?

指導の工夫例

- ・ 関係代名詞を用いた表現(下線部)には加点するなど、既習事項をできるだけ使うことを勧める。
- ・ 紹介する人物名を聞き手に推測させるようなスピーチにする。

指導のポイント

単元の指導に先立ち、生徒の表現例を想定した上で、単元終末に向けて計画的に指導する。場面設定を行い、話したり伝えたりする目的をもたせた上で、自分の考えや気持ちを話したり伝え合ったりする活動を行う。

ペア活動などでは、原稿を書いてからやり取りさせるのではなく、メモ等を基に多くの相手と伝え合う活動を行った後に、発話した内容を書かせるようにする。

4 既習事項として指導を行う際の留意点

文法に関して生徒が難しさを感じる理由の一つに、個々の知識が他とどう関連するかが分からないことが挙げられる。したがって、新出の内容と既習の内容との相違点や共通点が分かるようにするために、機会を捉えて知識を整理するようにしたい。

例えば、関係代名詞については、全ての用法を扱った後に、who, which, that がどういう時に使われていたかを振り返らせる。そして、関係代名詞は、その直後に動詞が続いたり、主語と動詞が続いたりするという違いがあるものの、直前の名詞を説明する時の合図のような働きがある点では共通していることを押さえる。また、関係代名詞は、ある名詞についての説明を詳しく述べたい時にその名詞の直後に語句を続ける、いわゆる後置修飾のグループに含められる。同じグループの他の用法である前置詞句(a boy under the tree)や分詞(a boy dancing on the stage)などを併記し、働きがよく似ていることを確認させたい。

既習の表現を場面や状況に応じて適切に活用できるようにするためには、個々の表現が「どのような時に使われるか」ということに加え

て、「どのような時に使われないか」という判断ができるようになる必要がある。関係代名詞としてどの語を選択するか、あるいは、関係代名詞を使わず、前置詞句や分詞のどれを選択するかを自在に判断できるようにするには、そのための経験を積ませることが欠かせない。したがって、導入の段階から数多くの文に触れさせ、個々の表現のもつ意味や働きを理解させるとともに、折に触れてそれらの文を比較させるなどの工夫をしたい。

教師による英語使用は、生徒にとって、授業の自然な流れの中で既習事項を思い出したり、新出表現の意味や用法に気付いたり理解したりする機会になる。また、教師と生徒、生徒同士による言語活動の機会を増やすことにもつながる。小学校外国語教育で扱われる語彙や表現を踏まえ、単元終末の言語活動で生徒に使わせたい表現や、次時以降で扱う語彙や表現に触れさせたり、定着に時間を要する表現を繰り返し聞かせたり使わせたりするなどの意図的な働き掛けを行いたい。

- 引用・参考文献 -

文部科学省『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』平成29年7月

文部科学省『中学校学習指導要領解説 外国語編』平成29年7月

(教科教育研修課 別枝 昌仁)